
自転車ヒーロー

沢山書世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自転車ヒーロー

【Zコード】

Z7649Q

【作者名】

沢山書世

【あらすじ】

自転車に乗れないことが親友サトルに知られそうになつたエイジ。その場は何とかごまかしたが、一週間後に自転車に乗つてくることを約束させられてしまう。あわてて内緒での練習を始めるのだが、それがなかなか思うようにはいかない。そんな時に現れた助つ人が、はた迷惑な存在で・・・。プライドというものは、とんでもないことをやらせてしまう原動力になるんですね。

(前書き)

共感していく力がこころといわれています。

「昨日、自転車を盗まれちゃってよー、まこつたよ
「えーっ、ひでー奴がいるなー」
「鍵をつけてんのにだぜー」
「つけていても、かけとかなきやダメだり
「ちゃんとかけてたよ、あたりまえだろ」
「えつ、それでも持つていかれちまつたのかよ
「ああ、そうだよ。誰がやったかわからんねーけど、許せねーよなー」
「どろい鍵だつたんじゃねーのかー？」
「そんなことはねーと思ってたんだけどなー。まー、自転車屋に普通においてあるダイヤル式のチーンキーだけど、みんなが使つてる代物だしなー。それを切られちまつて
「そーかー」
「もつとガツンとした鍵をつけなきやダメだな
「絶対に壊せない鍵つていうのはねーのかなー
「あるといいんだけどなー」
「うーん」
「そついやー、Hイジ、おまえはどんな鍵をつけてるんだよ?」
「え? 僕?」
「エイジはドキッとした。
「ああ、お前の自転車の鍵だよ。参考までに教えてくれ
「差し込んで、力チャツとやるやつ」
「ふーん、古典的なのを使つてんね」
「まー、物持ちがいこつづーことかね」
「で、その鍵を付けていて、自転車を盗まれた」とはねーのかよ
「ああ、ないよ」
「ふーん、被害に合つてしまわないは、鍵の良し悪しだけじゃなくて運
もあるんかねー」

「やうかもなー」

「やうかといつて、運が悪かつたで済ましていたんじや、これからも盗まれかねないからなー」

「やうだー。サトル、このやい鍵を十個くらこつけてみたらどうだ？」

？

「あほかー、自転車よりも鍵代の方が高くてこりまつだらーが」「でも盗まれるつて」とはなくなるだろ」

「そりややうだらうかど、鍵の開け閉めも大変だよ」

「やうかー。じゃー乗らなこときはタイヤの空気を抜いてまつてのはどうだー」

「勘弁してくれよ」

「降りたら、自転車を背負ひちやうつてこりのせどりつかな。肌身から離せなければ安心だ」

「お前なー、本氣で心配してくれてんの？」

「もううん。俺なりにだけどね」

「おちよくつてこりのよつてしか聞ひえねーぞ」

「悪じ悪」

「あれ？ そーいえばさー、俺、お前が自転車に乗つてると、見たことあつたつけかなー」

エイジはドキッとしながら、

「そりやー長い付き合いなんだから、見た事あんだろ」「

サトルが首をゆづくり横に振りながら、

「いや、一度も無いなー。記憶にねーもん」

「うたえたエイジが、

「ど忘れだろ、しつかりしてくれよ」

サトルがエイジの顔を覗き込みながら問いかける。

「あー。ひょっとして、おまえ自転車に乗れないんじゃないの？」

「そんなわけねーだる。なにをバカなこと言つてるんだよ」と返事をしたが、エイジは汗汗の状態。

「自転車に乗つている人間が、さつきみたいなへんてこなアイディアをだすとは思えないんだよなー」

「さつきのは冗談で言つたんだよ。本氣で言つわけがないだろ」

「そーかー?」

「さつきはふざけ過ぎた。俺が悪かつたよ」

エイジは謝つて済まそつと思ったが、疑い始めたサトルは引かなかつた。

「じゃーよー、今度会うときには、お前自転車で来いよ

「自転車で? めんどうくせーなー」

何とかサトルを諦めさせようとエイジ。

「お前が自転車に乗れるつていう証拠を見たいんだよ

「自転車に頼ると、足腰が弱つちまうからなー」

「大丈夫、荷物を積んでくりやいよ。いい運動になるぜ」

「重いと足腰を痛めちゃうからなー」

「つべこべ言うなよ。一回でいいからさ、なつ」

「ゼロ回じやだめか

「ダメだ!」

「一回もゼロ回もいつしょじやん

「うんにゃ、全然違うだろ!」

「あのよー、お前は俺を信用しないつてわけ?」

エイジは少しばかり逆切れをして、サトルを諦めさせようと試みた。

「もちろんいつも信用しているさ。だけば今回だけは信用しない」

サトルには逆切れ作戦は効かなかつた。

「今回も信用しよよ、いつもどおりのお前でいのよ

「まいったなー。一週間で自転車に乗れるようになんなきや、俺の面子が立たねー。乗れないつづーことがあいつにばれたら、あたりに言いふらすだろーからなー。世間に知れ渡つたらかっこ悪くて街を歩けねー」

ハイジは小さい頃、自転車に乗る練習をするにましていた。しかし散々転んだ末に乗れないまま挫折していたのである。そんな幼いころの苦い経験を思い出し、

「まこつたなー、あん時、諦めずにせつておけばよかつたなー」と、独り言をつぶやいた。

「まー、いまさら後悔しても始まらねーや。練習しよう、まずは自転車を手に入れなきやな」

「俺は形から入らねーと、やる気が沸かないタイプだかんなー。みてくれのいこやつを探しにこいつ」

「近場で買つと知り合いで叩撃されてしまい可能性が高いなー。駅わきにある、隣街の自転車屋を覗いてみるか

ハイジはキョロキョロと見まわし、知り合いがあたつこいないと確認しながら自転車屋の中へ入つていった。中ではつなぎを着たおやじが自転車を磨いていた。おやじはハイジの入店に気付くと、作業の手を休めて、近寄つてきた。

「おやじさん、じつに自転車が欲しいんだけど」とハイジがおやじに声をかけた。

「こりつしゃいませ、じつに自転車ですね」

相手は専門家である。すぐに店の奥から、一台の自転車を見つくるつてハイジの前に持つてきてくれた。かなりいいこ代物だ。

「これなんかはどうですか？ 男っぽいでしょう」

「うん、丈夫な感じがいいねー」

「ちょっとやそつとじじゃ壊れませんよ」

「ほー」

「まー、あんまり、転んだり、ぶつかつたりはしないでしょうかどね。乗つていて安心は安心ですよ」

「ほほー」

「試しに乗つてみてくれてもかまいませんよ」

「え？ いや、田で見れば解るから、乗るのはこいつですよ」

「いやいや、見た目だけじゃわからない部分もありますから。さあ、遠慮なさいず乗ってください」

エイジの気も知らず、おやじは試乗を勧めた。

「大丈夫、大丈夫」

「いえいえ、大丈夫なもんですか、大きな買い物なんですから、乗り心地を味わってから決めてくださいな」

「いいつて」

エイジはおやじからの試乗の勧めをかたくなに拒否した。なにせ乗れないものであるから、提案を受け入れるわけにはいないのである。秘密を守つたままで、ここを乗り切りたいとエイジは思つていた。ところが相手は専門家である、エイジの執拗な拒絶に何かを感じとつたらしい。おやじがニヤツと笑いながら、

「お客さん、ひょっとして・・・」

「な、なんだよ」

「自転車に・・・」

「自転車に、なによ」

「おやじは、もつたらいぶつた後に言つた。

「乗るのが久振りなんですよ」

それを聞いたエイジは少しホツとした。自転車に乗れないことが、おやじにばれてはいないと思つたようだ。

「まあ、久しづりと言えば久しづりだな」

「どれくらい乗つていらっしゃらないんですか？」

「けつこう経つかな」

「あたしが当ててみましょうか？」

おやじは追及の手を緩めない。

「別に当ててくれなくてもいいよ」

「遠慮しなくてもいいですよ。ズバリ、百年振りですね、ヒッヒッ

ヒッ」

「なんだよ、百年つていつのま」

「つまり、早い話が、お客さんは自転車に乗れないんですね、ヒッヒッ

ヒッヒッ

「な・な・何を言つてゐるんだよ！ 人聞きの悪いことを言つなよ

エイジは否定するが、図星だと顔に書いてあつた。

「わかりました、わかりました、こうしましょう。あたしと一緒に練習しましょう」

おやじは両手をエイジの肩に乗せて力強く協力を申し出た。

「練習なんかいらねえよ、濡れ衣だ」

おやじの手を振り払うエイジ。

「濡れ衣ですつて？ お密さん、専門家をして往生際が悪いですよ」

「何が悪い、濡れ衣だから濡れ衣だと言つてゐるんだ」

「怖くありませんよ。あたしが後ろから押されていてあ・げ・ま・す・か・ら」

「いいよ、一人で練習するから。・・・あつ、いけね

エイジはつい、口を滑らせてしまつた。

「ヒッヒッヒッ。お密さん、とうとう白状しましたね

「きつたねー、ひつかけやがつたな

エイジはおやじにくつてかかつた。

「まーまー、もうばれてしまつたんだから、やせ我慢はこれくらいにして、一緒に練習しましょうよ。あたしをお父さんだと思つてくださいでけつこうですから」

おやじはエイジにやさしく言葉をかけた。

「おーとわづだ。俺は反抗期なのー！」

隣街の道を、今購入したばかりの自転車を引いて、てくてくと歩くエイジ。目指す目的地は河原だ。人目に触れやすくてはあるが、広々としているため遠目に誰だかの判断がされにくい場所だ。エイジはそこで特訓することに決めていた。横を小学生の乗った自転車が追い抜いていった。エイジは通り過ぎて行つた小学生を睨み付けると、

「まづ、今見ていろよ。いずれ、おまえを抜き返してやるからな、首を洗つて待つていろよなー！」

と叫んでいた。

河原についたエイジは早速、自転車に乗る練習に入つた。ペダルをこぎ始めたそばから車体がグラグラし、すぐに足を着いてしまう。わずか2メートルすらも進んでいかない。エイジは転ぶのが怖いのだ。

「いかんいかん、怖がつて足をつくな。たとえふらついたとしても、粘つて乗りこなさなきゃ。よーし、今度こそ乗りこなすぞ、そりや、」

「ゴー」
エイジは自分を叱咤激励しながら何度も挑戦した。足をつかないようになしたところで、それなら乗れるようになりますよ、といったあまいものではない。足を地面につかなければ、今度は体ごと地面にたたきつけられてしまう。

ガシャン。

「い、痛た」

「うーん、いくらやつても一秒しかもたねーなー」

エイジは考えた。

「じうなつたらスバルタだ」

エイジは自転車を土手のてっぺんまで引いて登つてゆき、その向きを百八十度かえて河原と対峙した。意を決したエイジはサドルにまたがる。目の前には下り坂が待ち構えている。

「怖ええ。下るというよりも、落ちるつて感じだな」

恐怖心は、いとも簡単に決心を搖るがしあじめる。

「人間は自転車に乗れなくても、移動ができる生き物じやん」と、特訓から逃れるための都合の良いささやきが頭をよぎる。

その時、エイジは突然背中をドンと押された。

「おわわわわー」

背中を押された勢いで、自転車と身体が土手の平坦な部分から下

り坂まで押しやられ、心の準備が整わないままエイジは滑降のスタートを切らざれてしまつた。

エイジは自転車のハンドルにしがみつき、めん玉を大きく見開いたまま土手の下り坂を落ちてゆく。やがて坂道が終わり、次は平地の河原を突き進んでゆく。残念なことにエイジはまだブレーキの使い方を知らなかつた。自転車とエイジは、スピードを緩めることなく、アーという声を地上に残して川面に着水した。

ザッバーンン。

エイジが自転車を引きずりながら、川から岸にあがっていくと、そこには腕組みをした自転車屋のおやじが立つていて。エイジがおやじに大声で尋ねた。

「おこ！ いま俺の背中を押したのはおまえか

「押したのではない、押してあ・げ・た・のだよ」

「あげただとー。俺はあんたにそんなことを頼んだ覚えはないぞ」

「さつきお前が支払った自転車の代金には、コーチ代が上乗せして

ある

「なにこー、勝手なことをするな！」

「もう遅いよ、契約は成立しているんだ」

「それにしたつて、いきなり押すとまどひこつもつだよ。怪我したらどーするんだ」

「怪我をしたのか

「いや、してないけど」

「だつたらいいではないか

「何がいいんだ、いいわけないだる、この不良おやじ」

「コーチと呼びなさい！」

「父親になつたり、コーチになつたり、ビックの野球漫画みたいなやつだな」

「つべつべ言わずに聞け。お前は今、俺が押したおかげで自転車を

「乗りこなせたじゃないか」

「えつ？ まー確かに乗れたわな。それは紛れもない事実だけど・・・」

・・・

「「」の訓練を繰り返せば願いがかなう」とを、お前は身を持つて学習したのだ。さあ、訓練を再開しようか」

「再開するだー？ これを繰り返すだー。いやなこいつたい、何度も川に飛び込みたくないね。俺は魚じゃない。えら呼吸はできないんだよ」

「自転車に乗れないうえに、泳ぎもだめなのか」

「違うよ、自転車は陸の乗り物だ、ずぶ濡れにはなりたくないと言つてているんだ」

「わがままな奴だ。しかたない、別の方を使つか」

「別の方法があるのかよ」

「ああ」

「だつたら、それを教えてくれ」

「まず聞くが、お前は、止まっている自転車に乗つていられる人間を見たことはあるか」

「ないなー」

「そつだろ。つまり、自転車が動いている場合に限つて、人は自転車に乗つていられるわけだよ」

「うんうん」

「スピードが遅ければ遅いほど自転車は止まっている状態に近い。つまり倒れやすくなるんだ」

「ああ」

「びぐびくしてスピードを押さえてしまひと、余計によみがえてしまうのは、これで説明がつくだらう」

「なるほど」

「逆に言えば、スピードが速いほど、自転車は安定してくれるとこ

う」とだ

「やうかー」

「さつき坂道でお前が倒れずに自転車を乗つこなせたのはさうこつ理由だ」

「理屈は解つた。しかし、もう坂道は使いたくない。また川に飛び込んでしまつからな。おやじは坂道を使わないで済む方法を知つているんだろ、それを早く教えてくれ」

「うん、ちょっと待つていろ」

おやじは土手の上に登つて行き、ここまで乗つてきたバイクを押しながらハイジのところに戻つてきた。

「これを使う」

「このバイクを?」

「そうだ」

「どうやって使うのよ?」

「お前を乗せた自転車とのバイクを紐でつなぎ、引っ張りながら走るんだ」

「スピードが出そうだな」

「そうだ。これなら坂道を使わずとも、平地で先ほどと同じ効果を得られる」

「川に飛び込まなくても、さつきのよつに乗れるつていうわけか」

「そうだ、解つてくれたようだな」

「うん。ちなみにこのバイクはどれくらいのスピードが出るんだだよ?」

「喜べ、百二十キロまで出せるぞ」

「そんなスピードは必要ないだろ」

「百キロを超えると、気持ちいいぞー」

おやじはわくわくしながら説明した。

「そこまでは上げないでくれ。そんなスピードには俺の体も心も耐えられそうにないよ」

「やうか、しかたない。ぼどぼどのスピードにするか」

おやじはひとつと残念そうと言つた。

「ぐれぐれも頼むよ、おやじ」

「ああ、解った。もし万が一スピードが出過ぎたら、その時は叫つてくれ

「了解」

「あつ、それから念のため、ブレーキの使い方を教えておくか」「そうだな、教わつておけば保険になる」

おやじはエイジにブレーキの説明を始めた。

「ハンドルの下についている取つ手があるだろ?」

「これか」

「そうだ、それがブレーキだ。左右両方についているからな。これをハンドルと一緒に握ればブレーキがかかるようになつている」

「解つた、これで安心だ」

「よし、じゃあ始めるとしようか」

「おう、早速やつてくれ、おやじ。こや、『一チ』

おやじがバイクにまたがつた。後ろを振り返り、エイジに一声かける。

「いくぞ」

「いいよ、オッケーだ」

元気に返事を返すエイジ。

ブロロロロロ。

けたたましい音とともに、おやじの乗つたバイクがスタートした。自転車とつないだ紐が、まずピンと張り、続いて自転車にまたがつたエイジを引っ張つていった。エイジの足が、軽く地面をこすりながら進む。

一台が河原の風を切つてどんどん進んでいく。自転車の車体が安定した所で、エイジは勇気を出して、地面から足を離してみた。

「どうだー、乗れているかー」

おやじが後ろのエイジに声をかける。

「おー、おやじ、やつたよ、乗ってるよ、わはははー」
エイジは笑いながら、おやじに返事をした。

バイクがスピードを上げていった。当然自転車のスピードもだん
だん早くなつていぐ。やがてエイジの中に小さな恐怖感が湧いてき
た。それはスピードが上がつていくにつれてどんどんと膨らんでい
つた。自転車の車体がきしみだしたころに限界が訪れ、

「スピードはこれくらいで充分なんじゃないかな？」

と、エイジがおやじに再び声をかけた。走りはじめよりもスピー
ドが増した影響で、バイクの出す音もそれに比例して大きくなつて
いた。エイジの声が音でかき消されてしまいおやじに届かなかつた
のか、バイクのスピードはなおも増すばかりであった。

「おーい、やめてくれー」

エイジが何度も大声を張り上げたのだが、スピードはどんどん増
し、やがて体感速度は百キロほどに達していった。

「もう限界だ」

エイジがブレーキを握りしめた。
ギュッ。

自転車のブレーキは、人がこいでいることを前提に作つてある。
百キロで走つているバイクと自転車を一度に止められるようには作
られてはいない。どんな状況の時にブレーキをかけるかは持ち主の
勝手であろうが、製品実験でも経験がないような重量とスピードで
かけられた強大な負荷に、ブレーキは耐えられなかつた。

ブチブチッ。

ブレーキのワイヤーがブチ切れした。

「あーっ」

思いつきりハンドルとブレーキを握つた力と、運転しているエイ
ジの心の動搖が自転車に伝わり、車体は一気に不安定な状態になつ
た。

グシャ。

「ロロロロ。

バシャアアアアン・・・。

車体は倒れ、横に振り落とされたエイジの体は河原を進行方向斜め前に向かつて転がり、やがて川の中へと吸い込まれていった。

力チャカチャカチャ。

おやじが自転車を修理している。そばではエイジが膝を抱えて座っている。完全に疲れ切った様子で、茫然と川を眺めている。

「丈夫な自転車だろ、ブレーキ以外はびくともしていないからな」
おやじが修理をしながらエイジに話しかけた。

「いい自転車を売つてくれて、どうもありがとうよ」

「これは有料修理になるぞ、いいか」

「どうぞご勝手に」

力チャツ。

「さあ、できたぞ。修理完了だ」

「そうかい、お疲れ様」

「さあ、気を取り直して、特訓の再開だ！」

「ええつ？ まだやるのかよ」

「あたりまえだろ。まだ乗れるようになつていしないんだもの」
「もういいよ」

「そんな弱音を吐くな。さあ、立てよ」

おやじがエイジを盛り立てようとする。

「おやじのやり方だと、俺の体がもたねーよ」
乗り気にならないエイジ。

「今度はさ、安全な方法でやるからよ」

「ほんとかー？」

疑うエイジ。

「ああ、作戦変更、スバルタはやめだ」

「そいつはありがたい話だけど・・・」

「こんどは基礎からいこう」

「だつたらつときあつよ。俺にだつて、自転車に乗りたい気持ちはまだ残つてはいるんだ。でもそれは、命あつてのものだからな。基礎からやるつてこいつのなら、そんな心配はこらないうだろ。ひとつお柔らかに頼みますよ」

エイジがまたがつた自転車の後ろの荷台を、オヤジが両手で持つた。

「おれが支えてこらからよ、安心するんだ。やつとペダルをこいで始めてみる」

「わかった」

ギー^一。エイジが^一。

少し自転車が進んだ。

「よし、いいぞ」

おやじがエイジに声をかける。

ギー^一。エイジがまたこいだ。

また少し自転車が進んだ。

「なんだか、ちょっと重いな」

おやじがつぶやいた。

ギー^一。

「やつぱり重いよ」

おやじが、自転車を押し続けながら、前でこぐエイジの様子を見た。エイジの手がブレーキを強く握りしめている様子がおやじの目に止まつた。

「おい、何をやつているんだ、何を。ブレーキを離さなきや、自転車は動いてくれねーだろ」

「いやだ。離したくない」

エイジは極度のスピード恐怖症になつてしまつたよつだ。ブレーキを離してしまつと、先ほどの恐怖の再現になつてしまふやうな気がするのである。

「こいやう、前に進みたくないのかよ」

怒るおやじ。

「ブレーキを離さないで前に進む方法はないのかよ」

「無理を言ひエイジ。

「あんれ。お望みなり、やつてやるよ」
とおやじはせり言つてポケットからハサミをとつだし、エイジの
前に出るとブレーキワイヤーを切つてしまつた。たしかにこれなら
ブレーキを握つていても自転車は進んでくれる、おやじは嘘は言つ
ていな」。

おやじはすぐに後ろに戻ると再び荷台を押し始めた。

ズルズルズル。

摩擦音がする。エイジは切られてしまつたブレーキの代わりに、足のブレーキを使って抵抗を続けていた。足の裏を地面につけて離そうとしないため、その摩擦で自転車がスムーズに進まない。

「おこ、足を地面から離しやがれ！」

「いやだ、怖いよ」

「足をペダルに乗せろ」

「絶対いやだ」

「じゃあ、諦めるのか」

「それもいやだ」

「めんべくせー野郎だなー。つせあこきれねーぞ」

おやじは押すことをやめた。自転車が止まつた。

「おやじ、諦めるな」

エイジは後ろを振り返り、おやじに訴えた。

「わかつてゐよ、おまえを見捨てたりはしないわ」

「ありがと。恩に着るよ」

「とほこいものの、恐怖心が邪魔をしているがせつは、訓練になり

やしねえな」

「なんか名案はないのか？」

エイジがすがるような目でおやじを見つめる。

「うーん

「無い知恵をしぼりだしてくれ

「そうだ！」

「なんか浮かんだのか？」

「エイジの目に希望がさす。

「ああ、浮かんだ。酒を使おう」

「酒？ 酒を使ってどうしようつていうんだよ」

「酒が入れば、気が大きくなる。恐怖心なんかはますます飛んでしまうぞ」

「俺は未成年だぞ、酒は飲めないよ

「飲まなきゃいい

「飲まなきゃいいって、いつたいどうするんだよ？」

「酒を尻から入れる

「エイジは固まった。

「ちょっと待つてくれよ、俺は尻も未成年だ

「だめか

「別の方法にしてくれ

「対処療法は諦めるか

「そうしてくれ

「とすると、根本治療だな。それを考えよう

「それだよ、それで行つてくれ

「まず、お前が何を恐れているのかを聞かせてくれ

「痛いのが嫌なんだよ。転ぶと痛い、それが怖いんだ」

「痛いのがいやなんだな、よしわかった

「なにか策が出たかい？」

「全身麻酔をしよう

「手術じゃないんだぞ」

「麻酔を使えば転んでも痛くないぞ」

「転んだ痛みは感じなくても、五メートルおきに転んでいたんじや、

歩いたほうがまだ速いぞ。乗れなきゃ意味がないよ」「そうかー、うーん。やっぱり乗れるようにならなきゃだめなんだよな」「

「二人乗りで乗ってみよう。初めは俺が前で」
「それが役に立つのかよ」

「自転車っていうのは乗れるようになれば、一生体が忘れないいらしゃからな。乗れている感触を体で味わってみるのが役に立つかもしれないだろ」

「それ、痛くなくてよさそうだな。試してみよ」

「さつそく一人は二人乗りに取り組んだ。

「しつかりと、俺の体にしがみついていよ。ギュウッと抱き付いて離すな」

と自転車の前に乗ったおやじが指示を出す。言いつとおりにする後ろに乗ったエイジ。

「なんか、体がべたつとくつついて、気色悪いなー」

とエイジ。

「我慢しろよ。一体にならないと、運転している俺の感覚がお前に伝わらないだろ」

とおやじ。

運転したのはおやじである、一人乗りでの走りは見事なものだった。それを三回こなしたのち、こんどは、前後を入れ替わった。

「今までの感覚を忘れないようにこいつ」

「賛成」

「初めは後ろにいる俺がペダルをこぐからな、しばらくして車体が安定したら、俺は飛び降りる。それを合図に、今度はお前がこぐのを引き継げばいい」

「説明を聞いているだけだと、つまらしきそつだな。はたして現実は俺たちの味方をしてくれるかな」

エイジの懸念は当たった。順調に進み始めた自転車からおやじが

降りた後、エイジはペダルをこげず、「あつさつと河原に足をついてしまった。自転車にまたがつたままで立ちつぶすエイジにおやじが声をかけた。

「やつぱり怖いのかー」「面田ない

「面田ない」

「身を守るために、つこやつてしまふんだろ?」

「条件反射だから、俺にはどうしようもないよ」「条件反射! それだよ、それ、条件反射を使おう

おやじに向田かの名案が浮かんだよつだ。

「えつ、こつたにどうやつて」

「靴の中に画びょうを入れておいつ。地面に足をつけば、画びょうが足の裏に刺さつて痛いだ」

「そりやあ、体重が画びょうにかかるば刺さつて痛いだろ?」

「十回くらい痛い思いをすれば、条件反射で足をつかなくなるよ

「いやだ、痛い思いをするのは一回でもいいめんだね」

「じゃあ、足をペダルに縛り付けて走るつてのはめだりだ?」

「狙いは何よ」

「足をつきたくてもつけなこつてわけよ

「俺が地面上に転がつて痛がつている姿がはつきつと想像できぬ」

「だめかー」

一人は河原に倒れこみ、空を見上げた。万策尽きたようだ。

「俺は昨日今日自転車に乗りたくなつたわけじゃないんだよ。本当は小さい時から自転車に乗りたかったんだ」「エイジがしみじみと語りだした。

「そうだったのか」

「正義の味方にあこがれでいてね」

「ふーん」

「正義の味方つて、乗り物で登場するだろ」

「そいやそうだつたな。あつ、ひらめいたぞ！　その手がまだあつたか」

おやじは起き上がると、河原を百メートルほど走り、ピタッと足を止めた。そして、振り返りざまエイジに向かつて叫んだ。

「俺は今、悪の組織の手によつて人質にされている。お前は、正義の味方だ。正義の味方は、乗り物で登場するぞ。ヒーローになりきつたイメージを持つて自転車に乗つてみろ」

「今度はイメージトレーニングかよ」

「早くしないと悪役が登場するぞ。人質を助けたければ、自転車に乗つて、ここまで来い」

「やれやれ、つきあつてやるか」

エイジは起き上がると、自転車にまたがつた。目をつぶり、自分がヒーローになつてているイメージを膨らませた。記憶が過去に見たヒーローをよみがえらせた。エイジはヒーローになりきつた。

「うおー。人質よ、待つていろ。今から助けに行くからな」

エイジはペダルに足をかけると、思い切り踏み込んだ。グシヤ。

「ダメだつたか」

「人質がおやじじや力が湧かないよ」

「人のせいにするな」

「今度こそ、本当に万策尽きたな」

「いや、あきらめなくていいよ。今度こそが、本当の俺の出番かもしないよ」

約束の日、サトルの前にエイジが自転車に乗つて現れた。おやじが突貫工事で作つてくれた幅50センチはあろうかという、どこから押しても倒れそうもない、太いタイヤがつけられた自転車に乗つて。

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7649q/>

自転車ヒーロー

2011年8月26日03時29分発行